

入山山長6巻

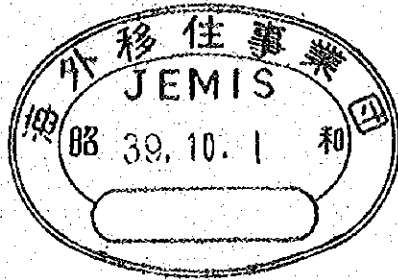
トミカ移住地の現況

1964年8月



D-23

ドミニカ移住地の現況



1964年5月

海外移住事業団

JICA LIBRARY



1020294[3]

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 8. 14	608
登録No. 02955	23.4
	EM

ドミニカ共和国には、本年6月15日現在117家族536人が在住している。主な入植地はダハボン、コンスタンサ、ハラバコア、アグアネグロ地区で、移住者は次第に都市近郊あるいはその他の地区に分散、発展していく傾向にある。

残留者の営農意欲は旺盛で、最近の農産物の価格騰貴とあいまつて極く一部の例外を除いては営農成績は非常に良好であり、中には相当大規模の機械化により米作を行ない、好成績をあげているものもある。ド国人の対移住者感情も、トルヒーリョ政權崩壊の混乱時を除いて、それ以後は、概して良く、とくに問題とすべき点は認められない。

○ダハボン移住地

本年6月15日現在の入植者数は29家族144人である。ダハボン移住地は、ドミニカ移住第1陣の入植者を中心に活潑な営農を続けている。主作物は米で、1戸当り80～100アレア(100アレア=6ha)の割当地の他に、移住地近傍において借地農業をおこなひ、1戸平均の米の栽培面積は300～400アレア(18～24ha)におよんでいる。

1956年7月にダハボン移住地に第1陣入植者が到着してから、今年は丁度満5年に当り、農業植民法の規定により正式地権が交付された。去る7月29日ドミニカ政府高官、関係者多数が参列し記念式典が行なわれた。当日は運動会、演芸会等盛沢山の行事に、移住者は笑顔の1日を過ごした。

今回の地権交付は満5ヶ年を経過した23家族に加えて、

未だ8ヶ年経過してはいないが家族にも適用されたことは、ドミニカ政府の日本人移住者に対する好意と信頼のほどがうかがえる。また、トルヒーリヨ政権時代に制定された農業植民法の規定および移住開始にあたり両国政府間においてなされた合意のとりきめを、現政権が履行したことは、当然のこととはいえ、他の地区に在住する日本人移住者に対して、安心感を与えている。

ダハボン移住地において、全体が米作を行なうには、水利の若干の問題があるが、昨今の移住者は移住地をむしろ居住の本拠として考え、営農の根拠は、水利の便の良い近郊借地においている。

現地人との関係については、現在コロニア内にすほどの現地人が居住しているが、彼らは日本人移住者の常備化しつつあり、階層の分化に伴う一種の身分関係と、相互依存関係が生じつつある。この状態は、ダハボンのみならず、他のコロニアにおいても通常みられるところのもので、現地人の背後によくに悪質な煽動者等が現われぬ限り、まず問題はないとみられている。むしろ、現地人は「日本人がいなければ吾々の生活が困る」といつているのが現実の姿のようである。

ダハボン移住地では従来、旧海協連当時、移住者に貸与されたディーゼルエンジンにより、或る程度の発電を行なっていたが、最近ド国政府より同移住地に対し、本格的発電設備が施工されるとの通報があり、関係者を喜ばせている。

○コンスタンサ移住地

コンスタンサ移住地はドミニカの中央部海拔1,200mの盆地であり、年中常春の移住地である。ここには現在20家族85名(6月現在)の日本人移住者が居住し、主としてトマト、キャベツ、ピーマン、カリフラワー、チンヤ等の高級蔬菜の栽培に従事している。中にはカーネーション、カーラ等の花卉を専業とし、好成績をおさめているものもある。

同地区は、その立地条件を利用して、ドミニカの低地で、盛夏に蔬菜の供給が停るその端境期に出荷することにより、面白味のある営農を行なうことができる。高値とうまくぶつかれば、1作数千ドルから1万ドル以上の粗収入を挙げることも珍しくない。また、コンスタンサの盆地は、ドミニカの軽井沢と称せられる保養地で、電気、水道、道路、クラブ等環境は良好である。

移住者に対する土地の配分面積はハボネサ地区100タレア(6ha)、後に入植したサビーナ地区は平均2.5~5.0タレア(3ha)であり、ハイチ国境より遠隔の地域では入植後10年で地権を獲得するとの取りきめにより、第1回タハボンに引き続き、明後年10月に地権が与えられる予定である。

この地区の問題としては、化学肥料のみの多投による蔬菜の連作により、土地の肥沃度がかなり減少してきている。緑肥作物の導入等による土壌改良が、同地区における永続的農業を考える場合、今後の課題となつている。

当団サント・ドミンゴ支部では、単一作物の連作による土質

低下の行開、冬期間低湿期における余剰労力の活用および同地区の気候条件等を総合的に検討し、ドミニカ国市場で極めて商品価値の高い冷涼性果樹を試験的に導入、栽培を奨励している。現在これらの果実類は主として米国より輸入されており、現地産果実（サランハ、マンゴ、パパイヤ、バナナ等）に比べて驚くほど高価である。昨年当団サント・ドミンゴ支部が米国から輸入した種苗には次の種類がある。

ブドウ樹、りんご、杏、梨、いちぢく、桃、柿、茸（マツシユルーム）

○ハラバコア移住地

当移住地には16家族88名おり、コンスタンサ移住地とラベীগ市を結ぶ街道沿いにあるため、ドミニカ内の集団移住地ではもつとも市場の便に恵まれている移住地である。標高は約800mであり、栽培作物としては、水稻、トマト、その他の蔬菜である。昨年は蔬菜類は大巾な高値を示し、移住地は活況を呈したが、今年4月26日、同移住地には30年来の豪風雨を伴った降雹があり、農作物に相当の被害を受けた。

熱帯における降雹は全く珍しいことで、雹降当時の状況を記してみると、当日の午前中は平常通り晴天であり、午後2時頃より曇り始め、3時半頃より小雨が降り出すと同時に雹が降り始めた。次第に豪風雨まじりの雹となり、直径2.5cm大の雹が約40～60分降り、移住地一帯が一時雹のため真白に覆われた。移住地のスレート・トタン屋根の家屋内で

は話もきくとれぬほどであり、各ロッテ内にある作業小屋および現地人の簡粗な屋根は吹き飛ばす程で、降雹中は危くて家外に出られぬ程であつた。

同移住地は最近になつてようやくもちなおし、移住者一同営農にはげんでいる。

○その他の移住先

その他コーヒー移住地（アグア・ネグラ、アルタグラシア）に6家族29名在住している。

同地区は、ハイチとの国境の僻地にあり、既に殆んどの入植者が帰国ないし南米転住を行なつたところであるが、残留者は既植のコーヒー樹を管理する一方、養鶏、豆栽培等を行なつている。コーヒーは現在ノキンタル（45kg）30ドルというかつてない高値を呼んでおり、かなりの現金収入を得ている。たゞ、同地区は全くの僻地であり、将来も生活の根拠をおくには必ずしも適当とは考えられないので、セント・ドミニゴ支部では移住者の意志および資金蓄積状況を勘案し、中央部へ漸次転住させることを考慮している。

その他移住者は都市近郊、その他各地に散在し、養鶏、近郊蔬菜作、商売等に努力している。生活状況は一様ではないが、殆んどがかなりの現金収入を得ている。特色あるものとして、ダハボンの一部の移住者が共同でドミニカ中央部の水田地帯を5,000タレア（300ha）借地し、トラクター、精米施設等を保有し、大規模な稲作を行なつているのは、家

族労働の枠を破つた経営として注目されている。

当団の在外各支部が行なつた入植者の営農現況の調査によれば、現金粗収入の面において、ドミニカは断然他移住地を引き離している。ドミニカのペソが米弗とバアであり、他国において使いがあつたのが強味であり、航空機による自費の一時滞留、墓参、あるいは南米視察者などが最近ボツボツあらわれているのは、ドミニカ移住者の最近の健闘振りと、営農成績を良く示しているものといえよう。

(ちなみに、10月のオリンピックにも数家族が母国訪問の予定といわれる)

以 上

本年6月15日現在の邦人移住者数は次のとおりである。

1. 邦人入植地別家族数及び人数

(1964.6.15現在)

地 名	家族数	人 数
1. ダ ハ ボ ン	29	144
2. コ ン ス タ ン サ	20	85
3. ハ ラ バ コ ア	16	88
4. ア グ ア ・ ネ グ ラ	5	25
5. ア ル タ グ ラ シ ア	1	4
6. ビ セ ン チ ・ ノ ブ レ	1	8
7. バ ニ	2	11
8. サ ン ・ ペ ド ロ ・ デ ・ マ コ リ ス	1	2
9. サ ン ・ フ ラ ン シ ス コ ・ デ ・ マ コ リ ス	1	5
10. コ ツ イ	2	11
11. リ ン コ ン	8	50
12. ボ ナ ス	1	1
13. ラ ・ ヴ エ ガ	1	2
14. サ ン チ ヤ ゴ	2	7
15. ビ ー ジ ヤ ・ パ ス ケ ス	1	3
16. ル ベ ロ ン	1	5
17. マ ン サ ニ ー リ ヨ	2	5
18. ロ ー マ ・ デ ・ カ プ レ ラ	1	6
19. コ ラ	1	4
20. ガ ュ ビ ン	1	4
21. サ ン ト ・ ド ミ ン ゴ	20	66
計	117	536

ドミニカ移住地の現況

1964年8月

海外移住事業団

ドミニカ共和国には、本年6月15日現在117家族596人が在住している。主な入植地はダハボン、コンスタンサ、ハラバコア、アグアネグラ地区で、移住者は次第に都市近郊あるいはその他の地区に分散、発展していく傾向にある。

残留者の営農意欲は旺盛で、最近の農産物の価格騰貴とあいまつて極く一部の例外を除いては営農成績は非常に良好であり、中には相当大規模の機械化により米作を行ない、好成績をあげているものもある。ド国人の対移住者感情も、トルビリーヨ政權崩壊の混乱時を除いて、それ以後は、概して良く、とくに問題とすべき点は認められない。

○ダハボン移住地

本年6月15日現在の入植者数は29家族144人である。ダハボン移住地は、ドミニカ移住第1陣の入植者を中心に活潑な営農を興えている。主作物は米で、1戸当り80~100タレア(100タレア=6ha)の割当地の他に、移住地近傍において借地農業をおこない、1戸平均の米の栽培面積は300~400タレア(18~24ha)におよんでいる。

1956年7月にダハボン移住地に第1陣入植者が到着してから、今年は丁度満8年に当り、農業植民法の規定により正式地権が交付された。去る7月29日ドミニカ政府高官、関係者多数が参列し記念式典が行なわれた。当日は運動会、演奏会等盛沢山の行事に、移住者は笑顔の1日を過ごした。

今回の地権交付は満8ヶ年を経過した23家族に加えて、

未だ8ヶ年に達していないが家族にも適用されたことは、ドミニカ政府の日本人移住者に対する好意と信頼のほどがうかがえる。また、トルヒーリヨ政権時代に制定された農業植民法の規定および移住開始にあたり両国政府間においてなされた合意のとりきめを、現政権が履行したことは、当然のこと、はいえ、他の地区に在住する日本人移住者に対して、安心感を与えている。

ダハボン移住地において、全体が米作を行なうには、水利の若干の問題があるが、昨今の移住者は移住地をむしろ居住の本拠として考え、背農の根拠は、水利の便の良い近郊借地においている。

現地人との関係については、現在コロニア内にはほぼどの現地人が居住しているが、彼らは日本人移住者の常備化しつつあり、階層の分化に伴う一種の身分関係と、相互依存関係が生じつつある。この状態は、ダハボンのみならず、他のコロニアにおいても通常みられるところのもので、現地人の背後にとくに悪質な煽動者等が現われぬ限り、まず問題はないとみられている。むしろ、現地人は“日本人がいなければ吾々の生活が困る”といっているのが現実の姿のようである。

ダハボン移住地では従来、旧海協連当時、移住者に貸与されたディーゼルエンジンにより、或る程度の発電を行なっていたが、最近ド国政府より同移住地に対し、本格的発電設備が施工されるとの通報があり、関係者を喜ばせている。

○コンスタンサ移住地

コンスタンサ移住地はドミニカの中央部海拔1,200mの盆地であり、年中常春の移住地である。ここには現在20家族85名(6月現在)の日本人移住者が居住し、主としてトマト、キャベツ、ピーマン、カリフラワー、チンヤ等の高級蔬菜の栽培に従事している。中にはカーネーション、カーラ等の花卉を専業とし、好成績をおさめているものもある。

同地区は、その立地条件を利用して、ドミニカの低地で、盛夏に蔬菜の供給が停るその端境期に出荷することにより、面白味のある営農を行なうことができる。高値とうまくぶつかれば、1作数千ドルから1万ドル以上の粗収入を挙げることも珍らしくない。また、コンスタンサの盆地は、ドミニカの軽井沢と称せられる保養地で、電気、水道、道路、クラブ等環境は良好である。

移住者に対する土地の配分面積はハボネサ地区100ヘクタール(6ha)、後に入植したサビーナ地区は平均25~50ヘクタール(3ha)であり、ハイチ国境より遠隔の地域では入植後10年で地権を獲得するとの取りきめにより、第1回ダハボンに引き続き、明後年10月に地権が与えられる予定である。

この地区の問題としては、化学肥料のみの多投による蔬菜の連作により、土地の肥沃度がかなり減少してきている。緑肥作物の導入等による土壌改良が、同地区における永続的農業を考える場合、今後の課題となつている。

当団セント・ドミンゴ支部では、単一作物の連作による土質

低下の打開、冬期間低漁期における余剰労力の活用および同地区の気候条件等を総合的に検討し、ドミニカ国市場で極めて商品価値の高い冷涼性果樹を試験的に導入、栽培を奨励している。現在これらの果実類は主として米国より輸入されており、現地産果実（ナランハ、マンゴ、パパイヤ、バナナ等）に比べて驚くほど高価である。昨年当団サント・ドミンゴ支部が米国から輸入した種苗には次の種類がある。

ブドウ樹、りんご、杏、梨、いちじく、桃、柿、茸（マツシユルーム）

○ハラバコア移住地

当移住地には16家族88名おり、コンスタンサ移住地とラベীগ市を結ぶ街道沿いにあるため、ドミニカ内の集団移住地ではもつとも市場の便に恵まれている移住地である。標高は約800mであり、栽培作物としては、水稻、トマト、その他の蔬菜である。昨年は蔬菜類は大巾な高値を示し、移住地は活況を呈したが、今年4月26日、同移住地には30年来の豪風雨を伴った降雹があり、農作物に相当の被害を受けた。

熱帯における降雹は全く珍しいことで、雹降当時の状況を記してみると、当日の午前中は平常通り晴天であり、午後2時頃より曇り始め、3時半頃より小雨が降り出すと同時に雹が降り始めた。次第に豪風雨まじりの雹となり、直径2.5cm大の雹が約40～60分降り、移住地一帯が一時雹のため真白に覆われた。移住地のスレート・トタン屋根の家屋内で

は節もきくとれぬほどであり、各ロッテ内にある作業小屋および現地人の簡陋な屋根は吹き飛ばす程で、隙縫中は危くて家外に出られぬ程であつた。

同移住地は最近になつてようやくもぢなおし、移住者一同営農にはげんでいる。

○その他の移住先

その他コーヒー移住地（アグア・ネグラ、アルタグラシア）に6家族29名在住している。

同地区は、ハイチとの国境の僻地にあり、既に殆んどの入植者が帰国ないし南米転住を行なつたところであるが、残留者は既植のコーヒー樹を管理する一方、養鶏、豆栽培等を行なつている。コーヒーは現在ノキンタル（45kg）30ドルというかつてない高値を呼んでおり、かなりの現金収入を得ている。たゞ、同地区は全くの僻地であり、将来も生活の根拠をおくには必ずしも適当とは考えられないので、セント・ドミンゴ支部では移住者の意志および資金蓄積状況を勘案し、中央部へ漸次転住させることを考慮している。

その他移住者は都市近郊、その他各地に散在し、養鶏、近郊蔬菜作、商売等に努力している。生活状況は一様ではないが、殆んどがかなりの現金収入を得ている。特色あるものとして、タバボンの一部の移住者が共同でドミニカ中央部の水田地帯を5,000タレア（300ha）借地し、トラクター、精米施設等を保有し、大規模な稲作を行なつているのは、家

族労作の枠を越えた経営として注目されている。

当團の在外各支部が行なつた入植者の営農状況の調査によれば、現金粗収入の面において、ドミニカは断然他移住地を引き離している。ドミニカのペソが米弗とバアであり、他国において使いでがあるのが強味であり、航空機による自費の一時帰国、墓参、あるいは南米視察者などが最近ボツボツあらわれているのは、ドミニカ移住者の最近の健斗振りと、営農成績を良く示しているものといえよう。

(ちなみに、10月のオリンピックにも数家族が母国訪問の予定といわれる)

以 上

本年6月15日現在の邦人移住者数は次のとおりである。

1. 邦人入植地別家族数及び人数

(1964.6.15現在)

地 名	家 族 数	人 数
1. ダ ハ ボ ン	29	144
2. コ ン ス タ ン サ	20	85
3. ハ ラ バ コ ア	16	88
4. ア グ ア ・ ネ グ ラ	5	25
5. ア ル タ グ ラ シ ア	1	4
6. ビ セ ン チ ・ ノ プ レ	1	8
7. パ ニ	2	11
8. サ ン ・ ペ ド ロ ・ テ ・ マ コ リ ス	1	2
9. サ ン ・ フ ラ ン シ ス コ ・ テ ・ マ コ リ ス	1	5
10. コ ツ イ	2	11
11. リ ン コ ン	8	50
12. ボ ナ ス	1	1
13. ラ ・ ヴ エ ガ	1	2
14. サ ン チ ヤ ゴ	2	7
15. ビ ー ジ ヤ ・ バ ス ケ ス	1	3
16. ル ベ ロ ン	1	5
17. マ ン サ ニ ー リ ヨ	2	5
18. ロ ー マ ・ デ ・ カ プ レ ラ	1	6
19. ゴ ラ	1	4
20. ガ ユ ビ ン	1	4
21. サ ン ト ・ ド ミ ン ゴ	20	66
計	117	536

